

●二人で味わう古典和歌(84)

思ふとはつみ知らせてきひひな草くさわらは遊びの手たはぶれより

みなもとのなまき
源 仲正

『ためたけしむどひやくしゆ為忠家初度百首』、「恋」の一首。「恋」とは言つても、仲正が六十七歳から七十歳の間に詠んだ作とされ、リアルタイムの恋ではなく子供の頃の幼い恋を詠っている。歌題は「契り久シキ恋」。逢瀬を約束したのについて叶わなかつた恋のこと。

「好きだよ、とつねって知らせたのだつたなあ。雛草を摘んで、ひな人形を作っていた、あの子供の遊びで一瞬、触れた手で。……「一瞬、触れた手で」、ピュアすぎる。そして人がときめく心の動きは昔とまったく変わっていない。

古希になろうとする仲正のロマンチックに胸打たれ、気を取られてしまいがちだが、レトリックの面からも注目してみたい。この作品が収載されている『為忠家初度百首』は、実験的作品が多く生み出され、和歌史上重要な結題百

首で、仲正は参加した八人の歌人のなかでも中心的存在であつた。

「つみ知らせ(つねって知らせる)」「ひひな草(雛草)」「わらは遊び(子供の遊び)」「手たはぶれ(一瞬の手の触れ合い)」など、めずらしい歌語や、造語を積極的に取り入れていることがわかる。和歌の技法としてそれまで主流だつたのは、歌枕や本歌取りなど、先行作品によって形作られてきた和歌的概念を巧みに引用することであつた。先行するあまたの作品世界の豊穡を一首の背後に感じさせることで重層的な詩情を生むことができる。そうしたオーソドックスな手法をあえて採らず、新奇な言葉や独自の表現を詠みこむのは詩情の共有を困難にさせる。リスクを承知しながら、旧来の概念よりも言葉そのものの持つ感覚を優先させる方向へ舵を切つたのだ。

のちに子供の頃の思い出を詠った連作として有名になつた西行の「たはぶれ歌」などは、この作品の影響を受けていると考えられている。和歌の表現史をあたらしく更新した記念すべき仲正の代表歌。

(小島なお)

